令和７年度　　学校経営報告

1　今年度の取組目標と方策

【　「考える力」を基盤とした「やり抜く力」の育成　】

（1）教育活動の目標と方策

①　学習指導（「考えさせる授業」の定着）

ア　「やり抜く力」を合言葉に、生徒の希望進路実現に沿う学力や実践力を身につけさせた。

イ　生徒に「考えさせる授業」を柱とした教育活動を一層の推進を図れた。

ウ　教科会において模試等の結果に基づく分析会を実施し、教科として対応策を検討・実践し、生徒の実態に合わせた適切な学習内容を設定させた。

エ　授業外学習時間の増加を図るため、各教科が学習指導内容・方法の工夫を推進した。

オ　「生徒が学ぶ」場である授業を一層推進し、生徒の課題解決意欲を引き出した。

カ　教科の枠を超えた相互授業見学や学校の枠を超えた研究授業参加等から、そこで得られた改善点を生徒に還元することで、教員相互の授業力の一層の向上を図った。

キ　教職員のデジタル技術の活用力を高め、オンライン学習活用の着実な定着を図った。

（自己評価）やり抜く力の育成は、授業実践において 95.7% の教員が考えさせる授業実践を多く取り入れたという回答に比例して、生徒肯定的評価 90.3%（一昨年度 76%→昨年度 87.5%）とその推進が実感として受け止められた。結果として、学校生活全般を通してやり抜く力が身に付いたかの項目では、生徒の 90.4%が身に付いてきたと回答している（昨年度の 83.7%）。ただし、教員はやり抜く力が身に付いてきたという実感は 80.8%に留まっており、教員と生徒のやり抜く力の捉え方に課題が残った。また、授業外学習時間の確保については、その時間を増加させたという回答が全生徒の 73.3%になり、希望進路実現を図るための努力も身に付いてきており、学ぶ場であるという授業の認識も 91.6%が肯定的に回答している。以上、教職員の不断の努力から学習指導については十分な成果があったと評価している。

②　進路指導（「やり抜く力」の意識づけ）

ア　３年間を見通した系統的かつ組織的な進路指導の見える化を推進した。

イ　創造的な自分の未来を「自分が決める」という意識改革を一層推進した。

ウ　希望進路実現のために果敢に挑戦する意欲の向上を図るとともに、その意欲に応えるために、各教科が適切な指導を展開した。

エ　「正解」と同様に「納得解」も大切にする進路選択力の育成を図り、卒業後の進路について選んだ道をいかに進むかという意欲的な姿勢を身につかせた。

オ　進路部が主導して、大学入試分析を根拠に、進路ガイダンスや相談機能を充実させた。

カ　教務部が主導して、長期休業中の多彩な講習の一層の充実を図った。

（自己評価）生徒の自分の未来は自分が決めるという強い姿勢が、今年度の進路実績に反映された。より大きな努力が必要となる希望進路実現を図るために果敢に挑戦し、結果を得ている。指定校推薦は、自分の行きたい進路先であれば応募するという傾向が強まり、自分の努力を信じて一般入試に臨む生徒が激増した。共通テスト申込者が 200 名を超えた（一昨年 119 名→昨年 163 名）。この生徒の姿勢に教職員は適切に対応しており、進路相談について 95.9%の生徒が十分対応してくれたと回答している。長期休業中の特別講座も充実させ延べ 600 名の生徒が、進路実現の助けになる講座を受講した。変化している生徒の進路希望に沿った教科指導の工夫改善が、課題である。

③　生活指導・安全指導（規律ある学校生活の定着）

ア　生徒が自ら誇りをもって、主体的に本校の生活規律を守り改善する態度を育成した。

イ　生活安全・交通安全・災害安全等の安全教育の一層の充実を図った。

ウ　いじめの未然防止・早期発見・早期対応に取り組むため、学校いじめ防止対策委員会機能や学校カウンセリング機能を充実させ、学校全体で情報共有し、いじめ総合対策に基づいた対応を一層推進した。

エ　本校ＳＮＳルールを生徒会が中心に検討・改善し、生徒へ周知していく環境は定着できていない。

オ　自転車安全運転指導により、登下校のヘルメット着用について組織的対応を継続した。

カ　SNS 等による違法行為について、被害者や加害者にならないよう未然防止を図った。

（自己評価）生徒の主体性を重視する指導を実践し、社会のルール・マナーを原則にして安全教育を充実させた高校生活を大切に指導した結果、生徒の学校満足度は 91.3%（一昨年度 86.8%→昨年度 89.8%）とさらに上昇した。「命を大切にする教育」として各年次、年 3 回の取組みを行うことで、いじめの未然防止につながっている。いじめ防止等に対して学校は適切に対応しているという生徒の肯定的回答が 88.2%となった。教員も生徒情報の共有の場として委員会組織をつくり、年間 16 回開催するなかで、組織として生徒一人ひとりに寄り添う体制を強化した。登下校のヘルメット着用率については、登校時は 100%を維持できているが、教員の目が届かない下校時は大幅に下回る傾向が続いており、保護者と連携した取組みが今後の課題である。SNS については生徒全体にルールが浸透しているが、入学当初の新入生に対して重点的に指導する場を、教員だけでなく生徒会からも周知させる環境を定着させたい。

④　特別活動・部活動（「やり抜く力」の実践的育成の場）

ア　各行事は、体調・時間管理等を徹底した上で、「生徒が楽しむ」場としての工夫を図った。

イ　生徒会・委員会・行事・部活動等において、自らの判断で動けるような主体的な行動力を育んだ。

ウ　体罰や不適切な言動のない指導を前提に、「生徒が打ち込む」部活動づくりを一層推進した。

エ　運動部・文化部ともに異校種との交流を推進し、部活動の活性化を図った。

オ　TOKYO GLOBAL GATEWAY 事業や本校に赴任した JET 青年２名を活用したグローバル人材育成を継続した。

カ　本校初めての海外修学旅行を成功させ、国際理解教育の一層の充実を図った。

（自己評価）やり抜く力の実践的育成の場が十分に機能し、生徒が主語になる教育実践が展開できた。本校では学校行事は生徒が楽しむ場と定義しており、生徒の 95.0%が充実したと回答している。さらに、部活動についても生徒が打ち込む場と定義したことで、部活動満足度は 97.0%と高評価である。今年度も、様々な部活動が全国大会や関東大会出場等を果たし、部活動も盛んな上水高校として中学生やその保護者、地域の方々の認識を高めた。JET 青年２名によるイングリッシュラウンジ経営は、オールイングリッシュの世界観を校内で実現しグローバル人材育成に寄与した。海外修学旅行は常に集合時間を守った生徒たちによって成功裏に終了したが、来年度に向けた課題も見つけることができ、さらに充実した修学旅行となるよう検討を重ねることが課題である。

⑤　心身の健康づくり（健康生活への組織的対応の推進）

ア　「保健だより」を活用し、生徒に保健室業務の一層の見える化を図った。

イ　教員の受容的態度を基本に日常的に生徒の状況を把握し、全教員が必要な情報を共有するとともに、各学期初めには生徒の状況確認を確実に行い、心身の健康づくりと早期ケアの充実を図った。

ウ　２名のスクールカウンセラーを活用した校内研修等を通じて、学校の相談体制・教員のカウンセリングマインドの向上を推進した。

エ　特別な支援が必要な生徒への共通理解と組織的な対応を推進するため、特別支援コーディネーターを中心にして個別案件に丁寧に対応し、インクルーシブな教育を一層推進した。

オ「TOKYO ACTIVE PLAN for students」に基づいて体力向上を図り、心身の健康づくりをより推進した。

カ　自他の生命の大切さを実感させる取組みやＳＯＳの出し方に関する教育を推進するため、組織的な相談体制を充実させ、生徒の心身の悩みに対応するとともにいじめ未然防止を強く意識させた。

（自己評価）保健だよりは定期配信（10 回）となり、スクールカウンセラーが身近な存在としての認識が高まり、生徒が相談をもって保健室に訪れる機会につながった。特に、命を大切にする教育では SC と連携して実施し、生徒の心身の健康づくりと早期ケアの充実を図ることができた。特別支援委員会を年 16 回開催し、生徒一人ひとりの心身の健康について取組むと同時に、個別案件については年次を超えた全教職員の情報共有につなげ、インクルーシブな教育とともに組織的な対応の推進につなげた。本校での自他の生命の大切さ実感させる取組みをいかに継続していくかが課題である。

⑥　募集広報活動（情報発信・提供の強化）

ア　進学・特活型の普通科単位制高校として、その特色の「見える化」を充実させた。

イ　「多様な希望進路実現への丁寧できめ細かい指導」という本校の長所を常にアピールした。

ウ　ホームページの随時更新等 SNS の活用により、本校の教育活動をタイムリーに発信し、中学生やその保護者、地域の方々の本校に対する興味・関心等の獲得に努めた。

エ　学校説明会や学校見学会等において本校理解をより推進するため、希望するすべての受験生やその保護者の方が来校できるよう工夫し、期待に応える本校をアピールした。

オ　ホームページの部活動・生徒会ニュースの情報発信を充実させ、より多くの情報提供をした。

カ　読書習慣の育み、英検２級取得への取り組み等生徒の日常の情報発信をした。

（自己評価）年間 700 回以上（昨年度 660 回）のホームページ等の更新を行った。今年度は、何げない日常や普段の授業の様子等を積極的に掲載し、より本校の生活がリアルに伝わるように工夫した結果、月間閲覧数は月平均にして 85000 回以上（昨年度 50000 回以上）と大幅更新となった。このことは、単位制である本校の魅力・特色等が広く伝わる一つの要因と分析している。さらに、学校説明会においては、すべての参加希望者に来校していただけるよう 3 回の機会で 2500 名受け入れを実現した。さらに希望者には平日も対応した。結果として、推薦入試倍率 3.73 倍（昨年度 2.92 倍）、一般入試倍率 1.45 倍（昨年度 1.32 倍）という結果になり、この倍率は 3 年間連続で上昇し本校の教育活動に魅力を感じていただけたものと受け止めている。今後も、リアルな本校を伝える情報発信のさらなる工夫が課題である。

⑦　学校経営・学校運営（連携と育成、体制の確立）

ア　西部学校経営支援センター支所との連携から、職務の効率化を図り学校経営の基盤をより強化した。

イ　OJT を活用して各職層の人材育成を図り、課題解決に取り組む活気ある校内体制を構築した。

ウ　「期待に応える学校づくり」を推進するために、学校評価アンケートに基づいた課題の解決を図った。

エ　「ライフ・ワーク・バランス」について、計画的な仕事の進め方や業務の効率化を徹底させるとともに、都のコンサル事業を活用した働き方改革プランの推進を全教職員に取り組ませ、一方で、働き方改革を推進するために、保護者と協力関係を構築した取組みを展開した。

オ　服務事故０を継続するために、服務事故防止研修や様々な場面での相互・複数人チェック等を確実に実施し服務事故根絶を図った。

カ　学校の DX 化を通じて、職員室の改善及び業務の改善を図り、ペーパーレス化をより推進した。

（自己評価）期待に応える学校づくりの一環として、西部学校経営支援センター支所との連携を密に若手・中堅教員の人材育成を図った結果、活気ある校内体制が継続して構築できた。特に今年度は、ライフワークバランスにおける働き方改革のため外部コンサルタント事業も活用し取組んだ結果、時間外労働時間の縮減につながった。保護者の皆さんには、教職員の勤務時間が 8：20～16：50 であることの理解を深めていただいた。会議時のペーパーレス化は浸透し開催時間の短縮化につながった。服務事故０は継続できた。課題は、業務のスリム化による教職員の意識改革であり、さらなる働き方改革の推進である。

⑧　個性ある普通科単位制高校として（やり抜く力の発揮）

ア　国際理解教育推進校として、全校体制の英検受験・スピーチコンテスト・選択科目として第２外国語設置・国際交流事業・海外修学旅行・イングリッシュラウンジ等各種教育活動の取組を通じて、国際的感性やコミュニケーション能力を身に付かせ、国際社会の中で未来を切り拓く人材を育成した。

イ　「表現」（学校設定教科）を通して、その内容の充実を図りながら、自分自身が打ち込んだ表現科目について自信をもって実践していく自己表現力を育成した。

ウ　ブリッジ（総合的な探究の時間）により３年間を見据えた進路指導を実践し、生徒一人ひとり「正解」もしくは「納得解」の中で希望進路実現に向けて果敢に挑戦する能力や態度を育成した。

（自己評価）国際理解教育推進校としての様々な取組みは、在籍生徒やその保護者だけでなく中学生やその保護者にも大きな魅力となってきた。英検受験の取組みについては、今年度２０名の生徒が準１級合格という本校開校以来の実績を残し、新たな校風として根付き始めている。少なくとも２級合格を在籍中に取得するという全体的な流れはできた。表現については、自分がコツコツ築いた努力に誇りをもつという経験を体験的に習得している。このことは、将来社会に出て自信をもって活躍する人材の育成につながった。さらに、ブリッジにより果敢に挑戦する姿勢が育まれ、昨年度以上の進路実績をあげた。これらのやり抜く力を発揮させる場面は、学校全体の組織力にかかっており継続した取組み強化が課題である。

（２）　重点目標と方策

①　「やり抜く力」の育成　　生徒一人ひとりに、困難にあってもあきらめない勇気を育成した。

②　「考えさせる授業」の定着　　各教科で生徒の学力・能力等を分析し、指導内容を検討させた。全教員が考えさせる授業の実践という観点で相互授業観察を実施した。

③　教職員のデジタル技術の活用力向上　オンライン活用を生徒の実態に合わせて推進した。

④　授業外学習時間の増加　　各教科が計画的に推進。補習・補講体制を確立させた。

⑤　読書活動の推進　　授業やHR等も含めた教育活動全体で図書館の意図的活用を強く推進した。

⑥　新規に指定された「AIを活用した英語教育の充実事業」実施校として、具体的な取組を推進した。

（自己評価）「やり抜く力」の育成においては90.4%、「考えさせる授業」では90.3%とそれぞれ生徒は本校で身につけるべき能力の獲得に肯定的な回答をしている。教員は「考えさせる授業の実践」において95.7%が意識的に多く取り入れていると回答し、学校全体として方向性が一致してきた。このことは、最終的な目標でもある「やり抜く力」の育成に必要不可欠な状況であり、今後も発展継続させることが課題である。また、読書活動については、図書室の貸し出し冊数が4000冊を超え、このことは都立高校でもトップレベルの数値であり、読書が与える様々な好影響が学校全体に広がった。新規事業は、教育委員会からも高評価を受け、本校の取組みが全都立高校に紹介された。デジタル技術の活用推進は、全教員での活用という観点では課題が残り、さらに具体的な取組みが必要である。

令和７年度の数値目標と昨年度の実績

数値目標	令和７年度　数値目標	令和７年度　実績
①　進路決定率	９６％	９２．６％
②　大学入学共通テスト受験者数	１５０名	１８８名
③　特色ある大学等現役合格者数 ア　国公立・早慶上理GMARCH合格者 イ　医療・看護系大学等合格者	 ア　４０名 イ　希望者全員合格	 ア　４３名 イ　３０名（希望者全員）

④　資格取得 ア　英語検定準２級以上 イ　パソコン検定タイピングレベルＡ ウ　漢字検定準２級以上	 ア　200名（２級111名） イ　２４０名 ウ　１０名	 ア　245(2級110,準１級20) イ　２３５名 ウ　８名（２級４名）
⑤　部活動加入率	９３．５％	９０．４％
⑥　部活動　好成績 都ベスト１６、関東・全国大会等	８部	６部
⑦　図書館貸出冊数	３８００冊	４１００冊
⑧　異校種（小中学校等）との連携	４０回	４３回
⑨　学校説明会等参加人数 （中学生・保護者合計）	２５００名	２７００名
⑩　入学者選抜応募倍率 ア　推薦入学 イ　学力検査	 ア　３．００倍 イ　１．４０倍	 ア　３．７３倍 イ　１．４５倍
⑪　生徒の授業満足度 （考えさせる授業の実践として）	９５％ （先生は丁寧に答えてくれる）	９５.９％
⑫　学校満足度（肯定的回答） ア　生徒 イ　保護者	 ア　９５％ イ　９５％	 ア　９１．３％ イ　８９．４％